

美術科に於ける創造的能力を高める学習について

中 野 満 男

一般的に美術の学習における創造的表現というのは、小学校高学年の頃から低下しはじめ、中学や高校は暗黒の時代であると言われている。これは美術教育の根元にある最も重大な問題と考えられるので、その原因や対策を考えてみたいと思ったわけである。

まず、その原因を考えるとき、その大部分は「抑圧」とか、又はそれとよく似た意味の「抵抗」とかいうことばで呼ばれていることがらに帰するものであろう。つまり端的に言えば、中等教育においては、生徒に客観的な批判力や科学的な観察力が発達してくるのにもなって、例えば描画においては写実的な傾向をとり、その結果は素直な鋭い創造的能力がかくされてしまうということであり、又成長した彼等の批評眼を満足させるような作品ができなくなって創造意欲を失うことになるということでもあろう。

しかし、こうした生徒が発達成長するにつれて身につけてゆかなければならない大切な能力が、本当に創造的な働きに対してこれを害する役目しかしないのであろうか、それは避けることのできないものとしてあきらめなければならないものなのか。そこをもう一度充分考えてみようと思ったのである。

そこでそのための立脚点として次のことを考えてみた。

1. 技術や知識について

視覚的写実は常識的なものとして嫌われ、それ自体が一つの抵抗と考えられる場合が多い。たしかに創造は常識をこえたものでなければならぬ。しかしいつまでも常識をあたえないではいけない。中学や高校では、常識を得た上でそれをのりこえたものを目指すべきであろう。しかしそれは生徒も、指導する側も難しいことであり、努力をしてもその作品はつまらないものしかできない場合のほうが多いかもしれないが、創造しようとする過程に価値があるのであり、幼児の場合の作品とは、その意味や価値において別の質をもつものであると考えなくてはならないと思う。

抵抗の一種として技術が考えられる場合がある。たしかに程度を越えた難しい技術はそのために生徒から

その作業を続ける興味を失わせることになるし、たとえ意欲的な生徒である場合でも発想を表現まで持ってゆけない原因になるであろう。しかし技術はそういう与え方しかできないのではなくて、材料や技術を新しく知ることによって創造の場を広げるのに役立つことができるという結果をもたらすこともできるはずであり、そういう方法が正しいものであると考えられる。

2. 意欲について

意欲は好き嫌いということと大きな関係を持ち、それはうまく出来るという自信と関係があることはいうまでもない。中学生や高校生でも、本来物をつくったり描いたりする表現活動は一般に大変好きである。ただ、うまく出来ないから嫌いであり、したがってやりたくないという生徒も又少ない。この対策も考えなければならぬであろう。

創造の問題は美術教育の根本命題であり、あらゆる教材をあつかう上に、その背景をなし、その死活を決めるものであろう。問題は大きく、又いろいろな他の要素とからみ合っているために、それだけをはっきり抽出して理論的な検討を試みることはできない。したがってこの研究は実践の場での教材研究の形をとり、「創造」に焦点を合わせて授業の研究反省を行いながら、若し何か発見することがあれば、先づ一たんは無計画にはじめたのである。

しかし、こうした研究の中に、着眼点や方法の悪さから何の結果も出ないことが多かったが、かなり明らかに傾向が把握されて後の参考に役立つようなことがらだけを記してみたい。

1. 好き嫌いの原因について

創造的意欲や態度を能動的に動かす大きなものとして好き嫌いということがある。中学生全員に対して行った調査で（小学校と中学校の現在までの間に、美術（図画工作）が、好きであったものが嫌いになったり、嫌いなものが好きになったりというように変わったことがあったら、その時期と原因と思われることを書きな

さい。) というものの集計である。

イ、好き嫌いが移動する時期は小学校低学年で32% 高学年が36%、中学校31%であり、小学校は気持の変化も多いのであろうが、中学よりも移動がはげしい。中学では1年生よりも2、3年生で動く。男子は女子よりも移動が大きい。

ロ、原因を見るとき、小学校ことにその高学年では、児童画の展覧会や写生会、学校内の掲示等の入選や落選、成績の上下によって好き嫌いが変わるものが原因の半数以上であり、展覧会の功罪を考えさせる。そして又注目すべきことは例えばその絵が自分では悪いと思っていたのに入選したので絵のことがわからなくなった。それでかえって嫌いになったというものがあるのは、数は少いけれども考えさせられることである。又教師のはげましや賞める言葉で好きになる例も多い。こうした外からの働きで自信を持ったり失ったりする傾向に比べると小学校の低学年は比較的自分本位の気持で好き嫌いが移動し、中学生ではもっとしっかり自分の判断で自分の能力を知り（その判断が間違っていることもあるが）、それが原因となる傾向が強い。そして又中学生で好きになる原因の大きなものに「新しい技法を習って従来の自分の作品と違ったものができた。」というものが少なくないことから教材の技法的な変化が豊富である方がよいと考えられる。ただし、単なるもの珍しい技法は一時的な反応、若しくは安易な気分転換をもたらすだけですぐもとにもどり、永続的な意欲を動かすことにならないようである。小学校でクレパスの類とえのぐの違いがかなりの数の好き嫌いを変えるらしいことと合わせ、技法の問題は意外に重要な意味を持つものようである。

2. 生徒の批評眼について

生徒はどのような作品をよい作品と判断するであろうか。授業での作品批評の場合、生徒の発言や反応を見るとき、教師と生徒はそれが非常に近いこともあるし、遠いこともあるようである。作品の批評・指導、評価等の場合に、生徒の発達段階を尊重して生徒の判断や好みに合わせてゆくのではなくて、やはり一歩ずつ先へ引き上げてゆくのが正しいのであろうが、又それだけに生徒の判断力を知りたいし、生徒の好みをすることは、彼等の創造の目的とする地点を大よそ知ることにもなるであろう。

そこで、中学の2年生に対し、教科書に掲載されている描画の生徒作品についてよいと思うものから順番にあげさせ、これを集計してみた。生徒の好む作品はくわしくめんみつな写実画が多く、色彩が美しく調和

しているもので、この傾向は相当はっきりしている。調和していても沈んだ感じのものは好まず、反対に調和を失いかけている位発らつとしたものや、くせの強い、教師が見て面白いと思えそうなものは好まない。中には殆ど全部の生徒が嫌いだという作品もあった。

そこから考えて見ると、一部のよい絵については生徒の好みは教師のそれに近く内容の認め方も深く正しいが、認める幅が非常に狭いことが感じられる。したがって教師が頭に思い描いている様々な創造的なものが一部分しか生徒の理想と合致しないのでうまく生徒を動かして行かないと教師のことは空まわりしたり、生徒の頭を混乱させたり、評価に疑問や不満をもたせたりすることになるのであろう。したがって生徒がうまく反応を見せないときには出来得るかぎり丁寧な説明と納得のゆく話をしてやるようにしなければならないと思う。又表現活動で異った創造目的を持たせるときには、ねらいをできるだけはっきりさせてからはじめることが大切なことだと思った。

3. 技術と永続性について

前述したように技術は創造表現を阻害するといわれ、そして又創造的な表現は発想から表現の完成までの間にそういう抵抗をできるだけ減らして一気に短い時間に到達させたときに望ましい作品が出来るといわれる。このような方向とちがった創造表現の為の技術、又総合的で永続する創造活動を実験する意味もあって、中学3年生において一つの工作教材を長い時間をかけて行ったときの反省記録である。この工作は長さ40cm、巾10cmの木板を4枚ずつ使い、これをなるべく切断しないでたて、よこに組み合わせで作った飾り棚である。形は単純であるがかみ合わせて組んでゆくとところに案外の技術を必要とし、その形が相当に変化のきく自由さがあるものである。先づ正面図、即ち水平垂直の線の交錯で紙上の研究を色々させて、形の変化と機能性、強度等を検討させながら計画を練らせ、次にボール紙で縮尺した模型を作って研究させた。導入の話し合いをふくめてこの間5時間を使い、次に実物の木の板にとりかからせ、そこで行った調査の結果である。

この調査は上記の目的のことを探るためにこちらが考えた望ましい感想とその反対の感想とを一对とした形で色々な問い方をしたものであるが、その答が7：3以上異った数字を示したものだけをここにあげてみることにする。○印をつけたものの方が多く、つまり7割以上の数を得たものである。

- (イ) ○ 考えることが多くて難しいがそれでもおもしろくできる。
 いろいろ考えることが多くてめんどくさくなる。だからこの工作はきらいだ。
- (ロ) ○ あまりむづかしいことを考えないでもっと自由につくってみたい。
 いろいろ考えたり、先生に言われたりして工夫したのでよい形ができてよかった。
- (ハ) ○ 早く作ってみたいがなかなかない。
 なかなか本物をつくらないので作るのがいやになってきた。
- (ニ) ○ 模型なんかつくらなくてもいいから、はじめから実物を作ったほうが早く出来てよかったのに。
 ○ 模型を作ったりしていろいろよく考えたのでよかった。長くかかっても結局はこのほうがおもしろくできる。

この結果は(ロ)を除いてはやはり時間をかけたことが無駄でなく、創造の興味は持続されるものであり、又技術的なものをふくめた学習も創造の邪魔にならず、かえって総合的な深い学習がそれだけ強い意欲をうながすことがわかったようである。(ロ)の答も(イ)においてそれを打ち消すことになっており、この辺は質問する文章の不完全から(ニ)においてむしろ逆な意味の答となってあらわれているようにも思う。なおこれ以外の質問のものを加え、全体について望ましい答は68%を得たことも、この時間の配当がそれ程失敗でないことを示すと思う。

しかし、これは男女一緒にしたときの数字であり男女別に分けてみたとき、男子が望ましい答の方に優勢であるので、以上の結果の中身は、男子はもっと強い傾向を示しているし、女子はどちらがよいかわからない数を示している。したがって、男子はこういう教材にはもともと強い意欲と粘りを持ち得るし、技術的にも女子よりすぐれているためにこの場合の技術的な学習があまり負担になっていないのにくらべ、女子はややその抵抗が強すぎた感じであり、そこが問題になると思われる。

この工作が完成してから、その反省の学習の一部として、おもしろくできた場合の理由とおもしろくできなかった場合の理由とを記入させ、それをまとめてみた結果は、

イ、おもしろくできた理由(創造的意欲の原動力)としては、約8割のものが、「形を工夫すること。」「模型などでいろいろ研究すること。」「出来上りを想像しながら形を考えること。」等、機能・美観・構造等総合的に考えながら自分の思う形に計画してゆくことをあげており、それも男子に多いことと共に前記の中間の調査と傾向が合致している。

ロ、おもしろくできなかった理由(創造的意欲や興味を失う原因)としては、板に工作を加えたり組立てをしたりするときの技術的な困難を挙げるものが多く、やはりこれも女子に多いことは中間の調査と合致し、男子ではむしろ板の数の制約に対する不満の方が多い。

以上の調査を含めたこの教材の反省として

- 1, 時間を長くとったり、技術的なことを相当加味しても創造意欲に支障をあたえない方法をとる。
 - 2, 工作教材の場合、興味や意欲の点からみてもできるだけ自由な形になるものがよい。
 - 3, 男女を同一に見て、同一の形の学習をすることは無理を生じる。
- 等のことは少くもはっきり言えるようである。

この研究は結局授業の反省であったにすぎない。それ故明確な目標に対して周到に計画し一貫した方法によって行った研究では勿論ない。断片的で体系に欠けるものであり、更にこうした抽象的なことからの研究であるためにその結果の測定が非常に心もとないものである。創造性の周辺にある問題にさぐりをいれているものにすぎないけれども、問題が重要で大きなものであるだけに今後更にこの研究を継続してゆかなければならないと思っている。